

政務活動報告書

芦塚 典子



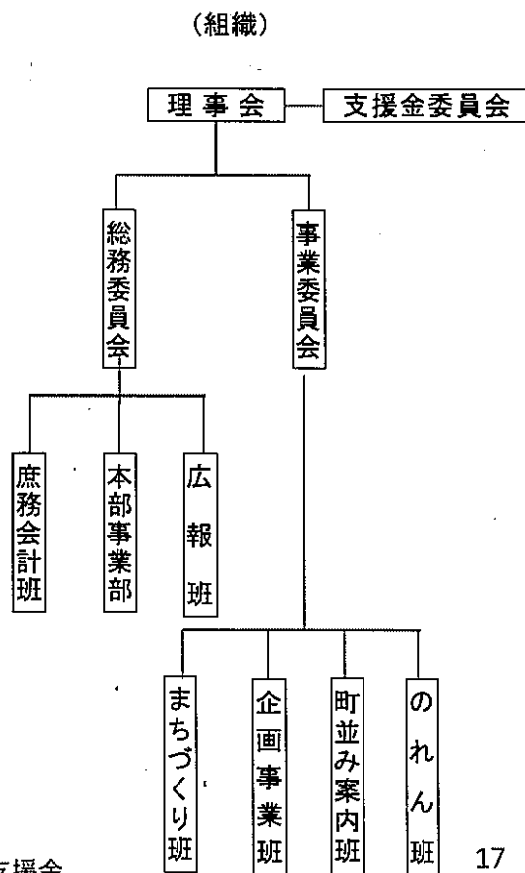
日時 平成26年10月21日(火)
 場所 千葉県香取市佐原
 内容 佐原伝建地区の観光政策と防災対策
 講師 NPO法人 小野川と佐原の町並みを考える会
 事務局 佐藤 健太良
 講師 NPO法人 小野川と佐原の町並みを考える会
 委員長 伊東 待子

理事長 高橋 賢一
 正会員 65名 賛助会員 11名
 年会費 12,000円
 賛助会員 一口 3,000円
 設立年月日 平成3年1月17日

NPO法人 小野川と佐原の町並みを考える会
 平成3年に佐原の歴史的町並みを残そうと、任団体として発足し、町並み保存計画の作成や保存活動を推進してきた。官民一体の活動が実り、平成8年には、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。その後はまちづくりに力を注ぎ、平成16年には、NPO法人を取得して拡大した活動を進めている。

- 昭和48年 国補助による町並み調査
- 昭和57年 日本観光資源財団による町並み調査「よみがえれ水郷の商都」
- 昭和63年 「ふるさと創生事業」アイデア募集
- 平成元年 三菱銀行佐原支店旧本館(上のフロア)が佐原市に寄贈
- 平成2年 「まちづくりを語り合う場」が発足
- 平成3年 「佐原の町並みを考える会」が発足
- 平成3年 「小野川と佐原の町並みを考える会」に名称変更
- 平成3年 三菱銀行佐原支店旧本館で観光案内を開設
- 平成3年 会員による建物調査、保存の勉強会
- 平成4年 町並み保存計画書を市長へ提出
- 平成5年 「佐原市佐原地区町並み形成基本計画」を策定
- 平成6年 「佐原町並み保存会」が発足
- 平成6年 条例制定「佐原市歴史的景観条例」
- 平成7年 小野川清掃、川ざらえ開始
- 平成7年 建設大臣「まちづくり月刊」の受賞
- 平成8年 保存地区指定(伝建地区、景観形成地区)
- 平成8年 「観光案内ボランティアガイド」が発足
- 平成8年 「重要伝統的建造物群保存地区」に選定
- 平成15年 伝統的建造物群保存地区協議会「佐原大会」
- 平成16年 NPO法人の取得
- 平成17年 佐原の町並み建物公開事業の開始
- 平成18年 「佐原町並み交流館」の指定管理者となる
- 平成18年 「小江戸佐原の骨董市」開始(毎月)
- 平成19年 「三菱館」の管理運営を市教育委員会から受託
- 平成19年 県知事表彰「文化の日表彰」
- 平成20年 県「建築文化賞」の受賞
- 平成20年 ポンネットバスの運行開始
- 平成21年 全国町並みゼミ「佐原・成田大会」
- 平成21年 読売新聞 平成百選に選定
- 平成21年 「町はぼくらの宝物」等DVD制作
- 平成22年 伊能忠敬関係資料国宝指定
- 平成23年 東日本大震災支援金募金・配布
- 平成24年 ワールド・モニュメント、アメリカン・エクスプレスより支援金

ボランティアガイド
 年間 400回
 15,000人を案内





さわらの町並み形成とその発展

佐原は、江戸時代に利根川東遷事業により舟運が盛んになると小野川沿いに物資を陸に上げるための「だし」と呼ばれる河岸施設が多くつくられた。

小野川沿いの商業都市としての町並みは、遅くとも南北朝時代につくられたとされる。

利根川東遷事業が完了し、小野川が利根川とつながると、東北地方などから物資が利根川を經由し江戸へ至るルートが確立されたため、佐原はその舟運の拠点となった。

新宿（小野川の西岸）では、六斎市が開かれにぎわった。

さらに成田や鹿島から、また東北地方からの米が集積され、米を原料とする醤油や酒の醸造業が盛んになった。

江戸中期には、35軒もの造酒屋が存在し、関東灘とも呼ばれた。佐原は香取街道のほか銚子方面、成田方面への街道も通じ、陸上交通の要衝でもあった。

佐原の町並みは、佐原が最も栄えていた江戸時代末期から昭和時代前期に建てられた木造町屋建築、蔵造りの店舗建築、洋風建築などから構成されている。

江戸時代後期になると、1838年には、人口が5647人を数え、江戸後期から明治時代にかけて佐原のもっとも栄えた時代である。

1898年、佐原に鉄道が開通すると、東京までの物資の輸送としての舟運は下火になるが、代わりに周辺の鉄道が通じない農村からの米などの物資を佐原駅まで舟で運搬し、それを鉄道で運ぶというルートが確立したため、その後も繁栄は続いた。

1933年、成田線が延伸されると、鉄道における佐原の優位性は薄まった。その3年後には水郷大橋が開通し、佐原地区の交通にも変化が見られるようになり、舟運は衰退していった。

第2次大戦後になると、佐原の中心部も駅周辺へ移動し、商業都市としての地位も低下していった。

結果として、小野川周辺の市街地には伝統的な建造物が残された。

1974年、町並み調査が行われた。保存より再開発を望む声が多かった。「道路を拡張して近代的な商店街を造る（53%）」、「伝統的な町並みを活かした商店街をつくる（29%）」

小野川に関しても、「汚いので暗渠にし、上は駐車場に利用する（35%）」「汚いので浄化する（60%）」という結果であった。



江戸時代の集積される米俵とだし(石段)

NPOが管理運営する町並み交流所



新たな打開策を見直そう

1991年「佐原の町並みを考える会」
市長に「町並み保存基本計画」を提出する。

1994年「佐原市歴史的景観条例」
「佐原の町並みを考える会」は反対住民や理解を示さない住民への理解を求める活動を続けた。

1996年 重伝建選定
まちづくりに新たな活発な動き。

ボランティアによる小野川清掃

行政による電線の地中化

「考える会」による観光案内の設置

地域の女性「佐原おかみさんの会」

舟による「町並みめぐり」事業

商店街の「佐原まちぐるみ博物館」



佐原の登録博物館伊能忠敬記念館と旧居

博物館所蔵の「伊能忠敬関係資料」2345点は、平成22年6月29日 国宝に指定されている
(ボランティアガイドによる説明より)

登録博物館伊能忠敬記念館の入館料

	大人	小・中学生	
個人	500円	250円	
団体(15人以上)	450円	200円	65歳以上の人は450円になります。窓口で年齢を証明できるものを提示してください。 香取市内に在住している小学校・中学校・高等学校の生徒および香取市内の小学校・中学校・高等学校に通学している生徒が入館するときは、免除となります。 記念館ではクーポン類は扱っていません。現金のみの扱いとなります。 水郷佐原山車会館との共通入館料は、大人800円、小・中学生350円です。



旧居に立つ伊能忠敬像

塩田津を測量した伊能忠敬一行

文化10年(1813)9月23日、嬉野町から測量を始め、塩田を測量し、脇の城橋(現錦江橋)で打ち止め、止宿は本陣 弥平治、脇本陣は善七、平兵衛他とある。



伊能忠敬旧居は入場料無料

伊能忠敬と佐野常民



- 文政元年(1818) 4月 忠敬没
- 文政4年(1821) 7月 大日本沿海輿地全図(正本)上呈
- 安政2年頃(1855) 佐野常民、伊能小図を写す
- 文久元年(1861) 8月 英国へ伊能小図引き渡す
- 明治6年(1873) 5月5日 皇居炎上 大日本沿海輿地全図正本焼失
- 明治9年(1876) 陸軍参謀局 伊能図の模写に着手する
- 明治13年(1880) 佐野常民 伊能家訪問
- 明治15年(1882) 東京地学協会で佐野が講演、贈位・偉功碑建設を提案
- 大正4年(1915) 2月 伊能図サンフランシスコ博覧会出品
- 大正6年(1917) 3月 長岡半太郎・大谷亮吉「伊能忠敬」刊行
- 昭和32年(1957) 2月19日 重要文化財指定
- 平成22年(2010) 6月29日 伊能図、国宝指定

漫画「伊能忠敬物語」も刊行されている



佐原の鹿島藩の飛び地5000石の郡陣屋(佐賀藩出張陣屋)

注 鹿島藩は藩扱いではなく佐賀藩とされている

関ヶ原後の徳川氏は、旗本、大名への在り地体制が急務であった。房総国は戦後処理のため、1～数万石クラスの在り地を幕府が城主(城持ち) 城主格 無城(陣屋) という格付けを、重要役職の任免や官位の叙任・江戸城内の伺候席と併せ、大名統制の手段として使った。房総には、大名・旗本・代官陣屋が割り当てられた。この在り地体制は関ヶ原後何度かの再編を経るもののその後の基本的な枠組みとなっていた。

中小家臣団は、知行所に屋敷を構え、そこに一族の墓所が在り地に見られるように、寛永期(1624～1644)に入って江戸に移すまでそこは知行所支配も兼ねた。

房総においては、関東諸大名(上野・武蔵) 飛地支配が多いが津藩や佐賀藩等の機内・西国大名、また、福島藩のような奥州の大名がある。この種の陣屋は、その支配地の成立事情やその後の経緯もまちまちである。

[郡陣屋](佐賀藩出張陣屋)

香取郡神崎町郡字岩崎他 / 下総国香取郡郡村

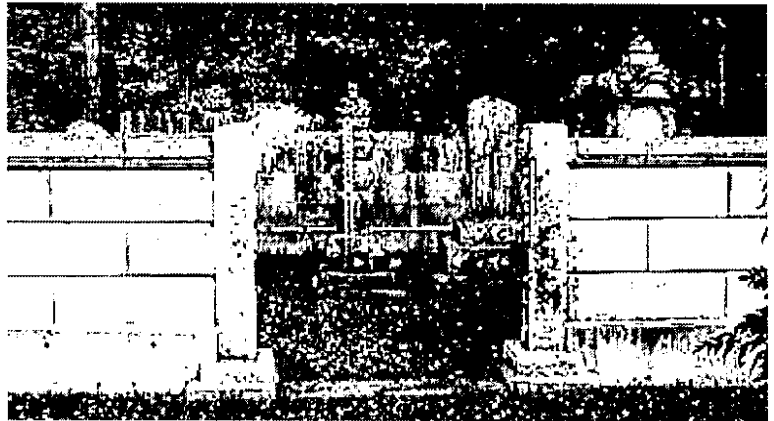
1. 当主 鍋島忠茂——正茂——正恭——直旨——長行(忠茂は鹿島鍋島初代藩主)
2. 封地 慶長5(1600)年 下総国香取郡内5,000石～元禄11年(1698)年
三河・遠江両国7郡内
3. 位置 神崎町郡円光寺西側の地で、水濠が一部遺存する。文献には「郡区字岩崎に在り面積九百余坪今民居と為り之を陣屋跡と称す」とある。
4. 規模 範囲は明瞭ではないが、文献の記述に従えば約3,000㎡となる。
5. 歴史 鍋島忠茂は肥前佐賀城主鍋島直茂の2男で、「寛政重修諸家譜」によれば、慶長5(1600)年「質として江戸にいたり、東照宮に拝謁す。この時仰せにより台徳院殿に勤仕し、御小姓となり、下総国香取郡矢作領のうちにおいて馬飼料5千石を充行」われた。この後、房総国に陣屋を建設したのは、元和2(1616)年としている。元禄11(1698)年に下総領が三河国に移ったことで、陣屋も廃止になっている。

文献には「上小川村に圓通寺という禅刹あり、この寺に鍋島内匠頭の墓石あり、この家元禄のころまで郡村に陣屋あり」とあるとおり、佐原市上小川円通寺には、一族の墓石(忠茂、忠茂室、正茂、正恭、直旨)や位牌等が存在する。

第二章 大名・旗本・代官陣屋

郡陣屋(佐賀藩(鹿島藩)鍋島飛地)

佐原上小川の円通寺の鍋島家墓所



佐原の町並みと塩田津



佐原の町並みを最初に訪ねたのは、平成12年。「重要伝統的建造物群保存地区」という言葉が初めて塩田津の町並みを駆け巡った年である。それから、訪ねる度に驚かされる。

また、「さわら」という言葉は特別の響きを持つ。「さわら五千石」鹿島藩の飛び地である。鹿島の2代藩主鍋島忠茂が鹿島を去り、居を得た土地である。佐賀城主勝茂の圧力に屈したのか、お家騒動を避けるためか、さわらに去った殿様の陣屋(城を持たない殿様の屋敷)跡がある。

訪れる度に「グッドニュース」がある町である。

1つは、伊能忠敬家が震災の復旧工事が完了、入場OK。伊能家の前の「じゃーじゃー橋」を渡り、伊能忠敬記念館では、平成22年に国宝と指定された「伊能図」を閲覧できたこと。

2つ目は、ほとんどの家屋で震災の復旧工事が終わり、開店していたこと。またその復旧費用が「平成23年度東日本震災支援金募金の配付」と平成24年「ワールド・モニュメント、アメリカン・エクスプレス」よりの支援金であったこと。

3つ目は、ボランティア・ガイドが素晴らしかったこと、佐原の伝建の歴史と成り立ちを、佐藤事務局長、町並み案内は退職教師の伊藤さん。記念館での伊能図の説明は詳細に亘り、伝建地区の説明も正確な史実を伝えていただいた。

4つ目は、佐原の町の商店が42軒、「佐原まちぐるみ博物館」に变身。買い物も楽しいけど、建物も奥の土蔵まで利用。

5つ目は、ニューレストランが出来ていたこと。「フランス料理のレストラン」「イタリア料理の店」、迷ったけど「イタリアン」に。お店のテラスには、すでに数名のお客さんが待っている。佐原の町並みをながめながら、約20分待つ。初めのサラダからコーヒーまで、グッドテイスト。塩田津にも素敵なお店が欲しい。



佐原の荷揚げ用の「だし」



塩田津の「タナジ」



まちぐるみ博物館:「土蔵の博物館」
中村屋商店



中村屋乾物屋 有形文化財(明治25年築)

佐原まちぐるみ博物館
正上:さわらシネマチック博物館
つくだ煮屋 天保3年(1832)築



左の二つのフォトは、千葉県佐原の荷揚げ用の「だし」と塩田津の荷揚げ用と生活用の「タナジ」タナジは塩田津の各戸にあり、生活用として、また、港にあげられる荷を土蔵に運ぶために利用していた。

舟運が盛んで、同じ大火の経験をもつことから、厚い漆喰と瓦の居蔵づくりの家が並ぶ。震災にも負けずに復興する「佐原」「どこも高齢化が課題です」「当初は観光客はゼロでした」・・・塩田津の再興は「さわら」に学ぶことゝ。